

死者を映した鏡 — 副葬品に基づく近世鏡の研究 —

関 根 達 人

1. はじめに

喜多川歌麿（1753?～1806年）の「姿見七人化粧」や「えり装い」が示すように、浮世絵の美人画には、しばしば、鏡とそれに映る女の顔が描かれる。鏡を用いることで、女的美貌と同時に、襟足や後ろ姿のなまめかしさが伝わる。この表現手法はその後も継承され、末期浮世絵の美人画を数多く手がけた初代歌川国貞（1786～1864年）の「今風化粧鏡」（1823年刊）では、全ての図柄が、柄鏡に映し出された美人の半身像で占められている。

考古学では、鏡は「失われた過去を映し出す遺物」として重要視される。経塚をはじめとする宗教関連施設への奉納鏡を除けば、出土鏡の多くは、墓の副葬品である。そして、そうした傾向は、弥生時代から古墳時代と、江戸時代において特に顕著といえる。

水鏡を除いて、現在知られる最も古い鏡は新石器時代に遡る。トルコ中部、アナトリア高原中南部に位置するチャタル・ヒュク遺跡は、黒曜石の産地に近く、その交易によって栄えていたと考えられているが、そこでは、B.C.6000年頃の墓に、黒曜石を円形に打ち欠き、周囲を石灰で固めた鏡が副葬されていた。

日本列島では、弥生時代の墳墓などから出土する、B.C.200～300年頃に主として朝鮮半島で作られた多紐細文鏡や、連弧文銘帯鏡、虺龍文鏡をはじめとする前漢式鏡が最も古い。前方後円墳が築造されるようになると、中国鏡や日本製の仿製鏡が数多く古墳に副葬されるようになる。

古墳時代後期には、墓への鏡の副葬が下火になるが、それは、中国の六朝末期にみられる鏡の衰退と相応する現象との指摘がある（樋口1979）。古墳へ鏡が副葬される背景には、鏡が権力と財産の象徴であったことに加え、鏡に呪術的威力があると信じられていたとの理由があげられることが多い。鏡の本場中国では、前漢の終わり頃から、道教の神仙讖緯思想の影響で、鏡に神霊性や呪術性が付加されるようになっていったとされる。

一方、「刀は武士の魂、鏡は女の魂」という言葉に象徴されるように、近世の鏡は、女の心と体の美しさを映し出すものとして、女性と深く結びついている。通常、大名の婚礼儀式に倣うかたちで、近世の結婚式が一般化した結果、婚礼道具にある鏡もまた、庶民にまで普及したと説明されることが多い（菅谷1991b）。

近世の鏡を研究しようとした場合、実物資料に加え、浮世絵などの絵画資料からもアプローチすることが可能である。近世の鏡は、それ自体さほど珍しい物ではないため、各地の博物館や旧家に行けば必ずと言っていいほど目にすることができる。一度にまとまった量の近世鏡を調べようとするなら、神社・仏閣への奉納鏡や、近世鏡を集めたコレクションも存在する。しかしそれらは全て、何らかの形で現在まで人づてに伝えられてきた資料であり、伝えられるべくして伝えられてきたという側面は否定できない。一方、近世墓の副葬品の中で、鏡は、六道銭、煙管、漆器について出土点数が多い。江戸時代に使われた鏡の実態を知ろうとするなら、生者が代々伝えてきた鏡とともに、墓に副葬することで死者の永遠の持ち物となった鏡もまた検討する必要がある。

2. 研究方法

東北地方で1999年度末までに刊行された発掘調査報告書に掲載された近世墓（後述するように一部近代墓を含む）のうち、調査以前に改葬を受けておらず、副葬品と墓壙の対応関係が判明する1388基の墓を選び、副葬された鏡の種類や副葬比率を検討した。

墓の時期の認定は、墓碑に刻まれた没年を最優先させたが、被葬者の没年が判らない大多数の墓については、六道銭として副葬された銭貨の組み合わせで、おおよその年代を与えた。筆者は、以前、東北地方の埋葬された実年代の判明している近世墓に関して、副葬された六道銭の種類を調べ、六道銭の組み合わせ毎におおよその実年代観を示した（関根1999）。今回もその年代観に則り、Ⅰ期（寛永通寶を含まず渡来銭のみで構成される）を1635年以前に、Ⅱ期（古寛永通寶を含み新寛永を含まない）を1636年～1665年に、Ⅲ期（新寛永背文銭：「文銭」を含み新寛永背無文銅銭：「新寛永」を含まない）を1666年～1708年に、Ⅳa・Ⅳb期（新寛永を含み新寛永鉄銭：「鉄銭」を含まない）を1709年～1830年代に、Ⅳc・Ⅳd期（鉄銭・天保通寶・文久永寶などを含み近代銭貨を含まない）を1840年代～1870年代に、近代銭貨を含む時期を1880年代以降に、それぞれ年代比定した。六道銭に近代銭貨が用いられていたり、墓碑に刻まれた年号などから、明治以降の近代墓と判る墓は、1388基中34基である（最新は1921年に没した南部義信の墓である遠野南部家墓所19号墓）。墓域が近世墓のみで構成されているとみなされる場合には、直接年号を刻んだ墓碑や六道銭を伴わずとも分析の対象に含めた。中世墓と近世墓が混在する場合には、できる限り中世墓を抽出し、それを除いて分析を行った。

その結果、1388基中78基の墓から合計80点の鏡が出土していることが判った。遺跡数にして30遺跡を数える（第1図）。旧仙台藩領の遺跡から多くの鏡が出土しているが、これは、この地域での近世墓の発掘件数が多いためであり、鏡の副葬率に地域的な差異は認められない。

なお、被葬者の性別の判定は、人骨の形質人類学的所見と墓碑に刻まれた戒名により行った。

3. 近世墓出土の金属製鏡

発掘調査により東北地方の近世墓から出土した金属製の鏡は、全て銅・錫・鉛（亜鉛）からなる

1. 新井田古館遺跡
2. 長瀬C遺跡
3. 水神遺跡
4. 下猿田Ⅱ遺跡
5. 上米内遺跡
6. 遠野南部家墓所
7. 高瀬Ⅱ遺跡
8. 岩脇遺跡
9. 大町家墓所
10. 摩知田遺跡
11. 瀬原Ⅰ遺跡
12. 柳之御所跡（第24次）
13. 大平遺跡
14. 宇南遺跡
15. 下藤沢Ⅱ遺跡
16. 色麻古墳群
17. 大日北遺跡（第1次）
18. 高柳遺跡
19. 新妻家他墓所
20. 経々峯伊達家墓所〔瑞鳳殿・善応殿〕
21. 陸奥国分寺
22. 富沢遺跡（第15次）
23. 泉崎浦遺跡
24. 山田上ノ台遺跡
25. 師山遺跡
26. 南諏訪原遺跡
27. 宇輪台遺跡
28. 水無遺跡（第2次）
29. 野中遺跡（第2次）
30. 白米中坪遺跡



第1図 鏡を副葬した近世墓が調査された遺跡

青銅合金で、鉄製の鏡は見当たらなかった。これらの青銅製鏡は、その形状により、柄鏡、円形鏡、方形鏡の3種に大別できる。柄鏡が最も多く、40基の墓から41点、円形鏡は19基から19点、方形鏡は8基から9点、それぞれ出土している（第1～3表）。

はじめに、年代区分のできる墓を対象として、時期毎の鏡の副葬率と組成比率を検討した（第2図）。その結果、Ⅰ・Ⅱ期に2%程度に過ぎなかった鏡の副葬率は、Ⅲ期以降、1割弱まで上昇することが判った。鏡の種類に関しては、Ⅰ・Ⅱ期には柄鏡と円形鏡がほぼ同数であったものが、方形鏡やガラス鏡の出現により、Ⅲ期以降、次第に円形鏡の比率が低下する。これに対して柄鏡は、江戸時代を通じて、副葬された鏡の約半数を占め続ける。これらのことから、東北地方で鏡が普及する過程において、17世紀後半に画期が存在することが推察される。

次に種類毎に、出土した鏡の特徴を述べていくことにする。

①柄鏡

近世墓から出土した柄鏡は、鏡面の大きさにより、小型品（直径9cm以下）、中型品（10～17cm）、大型品の3種に分けることができそうである（第3図）。小型品と中型品との境を、直径12cm付近にもとめることもできそうだが、唯一、複数の柄鏡が出土した遠野南部家墓所5号墓（1720年没26代南部信有室豊墓）には、鏡面径が10.7cmのものと、7.5cmのものとが副葬されており、これら2面の柄鏡がセットをなすものと仮定して、直径9cm以下を小型品とした。近世墓から出土した柄鏡のなかで大型品といえるものは、仙台藩三代藩主伊達綱宗墓（善応殿）から出土した、鏡面径が30cmを越す柄鏡ただ1面だけである（伊東編1985）。この柄鏡は、飯村土佐守藤原光重を指すとおもわれる「土佐」の銘を有し、裏面には、共伴した鏡架とおなじ雪輪に蔦葉を組み合わせた文様が施されている。出土した柄鏡の中ではこの鏡だけが突出して大きく、中型品とした柄鏡との間の開きが著しい。

次に、伝世品にも目を向け、出土した柄鏡と伝世した柄鏡を法量の上で比較した（第4図）。比較に用いたのは、東北歴史博物館所蔵の「五木田コレクション」と、仙台市在住の歯科医師吉中茂氏の蒐集品（吉中コレクション）にある柄鏡で、藤沼邦彦氏による計測値（藤沼・伊藤1995）を使用した。その結果、五木田、吉中いずれのコレクションにも、鏡面径が14～18cm前後のグループと、20～24cm前後のグループが存在すること、20～24cmのグループ（大型品）は出土品には見られないこと、30cmを越すもの（特大品）は伝世鏡においても稀であることなどが判った。優品に偏るコレクションでは、比較的大型の鏡が蒐集される傾向にあるため、出土品との間にこうした違いが生じた可能性が高いが、それだけでは出土資料に大型品が見られないことの十分な説明にはならない。ここで大型品とした鏡面径が20～24cm前後の柄鏡は、柄の幅が平均約3.9cmで、その平均重量は約897gを図る。常に手に持つ鏡としては重すぎる上に、柄がやや太すぎて持ちにくい。鏡面径が20cmを越える大型品や、30cmを越す特大品は、手鏡ではなく、鏡掛（鏡架・鏡立）や鏡台に据えて使う置き鏡であったと思われる。ちなみに、旧仙台藩主伊達家から仙台市博物館に寄贈された江戸後期の柄鏡には、鏡面の直径が約7寸、約六寸、約五寸の3種類がみられるが、約六寸の柄

第1表 近世墓出土の柄鏡

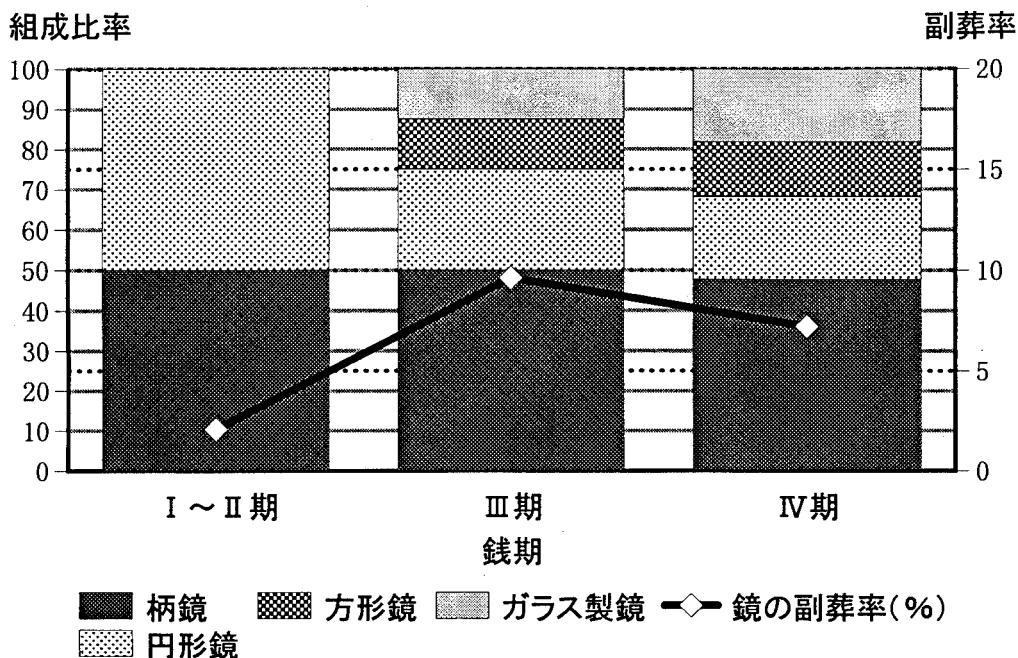
柄鏡出土墓名	銭期	埋葬年	性	鏡面積	直径(cm)	柄長(cm)	柄幅(cm)	文様	銘	備考(カッコ内は鏡師に関する情報)
新井田古館遺跡SK44	Ⅱ～Ⅳb	?	?	65	9.1	7.55	1.61	丸に柏紋 梅竹文	藤原重義	(松村因幡守藤原重義 元文5年・延享4年)
新井田古館遺跡SK128	?	?	女	54.9	8.36	?	1.45	蓮葉図	藤原作口	
水神遺跡ⅡJ3葬基	Ⅳa	?	男	60.8	8.8	7.1	1.5	御簾に美園	藤原光長	[宝永6年の作品あり]
下猿田Ⅱ遺跡12-2号墓址	Ⅳb	?	?	83.3	10.3	8.8	1.9	剣かたばみ紋	天下一	
上米内遺跡FD338土坑	Ⅳa	?	男	54.1	8.3	5.8	1.5	梅に鶯図	藤原作	
上米内遺跡FD519土坑	Ⅳb	?	?	45.3	7.6	5.1	1.2	南天図	藤原正安作	[加賀田河内守藤原正安 元禄年間]
遠野南部家墓所5号墓	?	1720年	女	44.2	7.5	4.9	1.45	三つ割り木瓜紋	野田肥前守藤原吉政	26代南部信有室豊〔中期〕
遠野南部家墓所5号墓	?	1720年	女	89.9	10.7	10.2	2	巴紋散らし	天下一若狭守	26代南部信有室豊
遠野南部家墓所9号墓	Ⅳa	1817年	男	52.8	8.2	5	1.2	七宝地に五三の桐紋	藤原光政	29代南部伯祖
遠野南部家墓所10号墓	?	1812年	女	46.5	7.7	5.4	1.4	菊水図	加賀田河内守	29代南部伯祖室お紋
遠野南部家墓所28号墓	?	1776年	男	118.8	12.3	9.8	2.5	山水樓閣図	天下一伊勢守桂定	28代南部義順男義興〔中期〕
遠野南部家墓所29号墓	?	1814年	女	24.6	5.6	3.2	0.85	波に千鳥図	藤原口口	南部義興墓
遠野南部家墓所35号墓	?	1894年	女	45.3	7.6	5.4	1.45	丸に五三桐紋	飯村土佐守光重	32代南部齊賀室石橋美弥
高瀬Ⅱ遺跡2号墓墳	Ⅳa	?	?	37.4	6.9	4.7	1.3	無文	藤原重次作	粉殻
沼脇遺跡4号墓墳	Ⅳc	?	?	50.2	8	?	1.6	丸に花菱紋+南天図	藤原光長	鏡面に布付着 上の庄屋門脇家
沼脇遺跡5号墓墳	?	?	?	32.2	6.4	2.4	0.8	不明家紋+車花園	～作	上の庄屋門脇家
沼脇遺跡14号墓墳	Ⅳc	?	?	54.1	8.3	6.1	1.4	唐草地にかたばみ紋	藤原光永	上の庄屋門脇家
沼脇遺跡29号墓墳	Ⅳa	?	?	60.8	8.8	8	1.6	松に南天図	天下一藤原作	上の庄屋門脇家
沼脇遺跡39号墓墳	Ⅳa	?	?	60.8	8.8	?	1.6	山水樓閣図	上嶋和泉守	上の庄屋門脇家
大町家墓所D-8号墓	?	1846年	女	40.7	7.2	5.4	1.3	若松図	不明	7代大町景綱室
大町家墓所D-11号墓	Ⅱa?	1873年	男	147.3	13.7	9.8	2.8	雲に牡丹図	天下一藤原守	初代大町景綱
大町家墓所D-13号墓	Ⅳb	1839年	男	47.8	7.8	5.8	1.7	文字「大」	福島出雲守吉定	8代大町景綱〔福島出雲守藤原吉定 中期〕
瀬原Ⅰ遺跡10-19号墓墳	ⅣaorⅣb	?	?	54.7	8.35	?	1.28	丸に唐花紋	藤原光永	[中期～後期]
瀬原Ⅰ遺跡10-20号墓墳	?	?	?	54.9	8.36	5.86	1.43	丸に五三の桐紋	藤原金吉	中島伊賀守藤原金吉 寛永8年 大坂久宝寺町
柳之御所跡第24次調査SX25	Ⅲb	1803年	女	224.2	16.9	8.5	2.6	三つ柏紋+柳下の川舟図	藤原義勝	[文久2年の作品あり]
柳之御所跡第24次調査SX53	Ⅳa	?	?	52.8	8.2	?	?	富士山田子浦図	藤原義勝	
柳之御所跡第24次調査SX63	Ⅳc	1794年	女	136.8	13.2	?	?	蓮葉図	藤原光長作	
柳之御所跡第24次調査SX74	?	?	?	88.2	10.6	8.6	1.9	丸に抱き柏葉紋+菊花図	藤原政重作	[寛永13年の作品あり]
大平遺跡A地区16号墓	Ⅳc	?	?	83.3	10.3	8.2	1.8	丸に桐紋+梅樹図	藤原光義	
大平遺跡A7地区28号墓	?	?	?	91.6	10.8	7.2	1.8	蓮葉図	藤原口	
下藤沢Ⅱ遺跡15号墓	Ⅳa	?	?	32.2	6.4	?	?	不明	上嶋和泉	
高柳遺跡SM17	Ⅳb?	?	?	39.6	7.1	?	?	芝垣に松樹図	藤原正?安作	上の庄屋門脇家
新妻家他墓地14号墓	?	1770年	女	60.8	8.8	?	1.7	南天図	中嶋和泉守	新妻源之丞祖母
新妻家他墓地15号墓	Ⅳ以降	1786年	女	45.3	7.6	?	1.4	文字(不明)	津田藤庵守藤原家長	新妻源之丞先妻
新妻家他墓地21号墓	Ⅲa	1695年	男	88.2	10.6	?	2	九曜文	天下一藤原作	
新妻家他墓地23号墓	Ⅲa	1870年	男	191	15.6	9.7	2.9	雲形に重ね桔梗紋	土佐(天下一飯村土佐守)	新妻胤重? 鏡箱 粉殻
新妻家他墓地23号墓	Ⅳ相当	1715年	男	716	30.2	11.2	5.1	雲輪に三鳥葉紋	上嶋和泉	伊達綱宗 雲輪と鳥葉散時鏡架
泉崎浦遺跡7b号墓	Ⅳa以降	?	?	41.8	7.3	5.4	6.9	波に扇の図	藤原重勝	
山田上ノ台遺跡1号墓	Ⅳa	1750年	?	169.6	14.7	9.05	2.7	蓮葉図	藤原南重	鏡箱 柄に紙付着〔中期〕
勝山遺跡SK8	Ⅲa	?	?	40.7	7.2	?	1.3	車花園	上嶋和泉	鏡面に布付着
白米中坪B遺跡SK12	Ⅳ以降	?	?	158.3	14.2	?	?	額に燕子花の図	藤原金益	[中期]

第2表 近世墓出土の円形鏡

円形鏡出土墓名	銭期	埋葬年	性	鏡面積	直径(cm)	文様	銘	備考
新井田古館遺跡SK42	Ⅳc	?	男	11.9	3.9	無文	なし	
遠野南部家墓所11号墓	?	1830年	男	?	?	無文	なし	紙・布片付着 30代南部義興
遠野南部家墓所27号墓	Ⅳa	1776年	女	13.8	4.2	無文	なし	
遠野南部家墓所40号墓	Ⅲa	?	女	103.8	11.5	蓮葉図	天下一	布付着
摩知田遺跡15号墓坑	Ⅳd	?	?	98.5	11.2	浮線綾双雀文	なし	黒漆塗り鏡箱 留守氏足軽小原家
瀬原Ⅰ遺跡10-5号墓墳	?	?	?	93.3	10.9	蓮葉図	天下一	鏡箱
瀬原Ⅰ遺跡10-6号墓墳	Ⅳc	?	?	105.6	11.6	花菱紋+蓮葉図	なし	
柳之御所跡第24次調査SX38	Ⅳc	?	?	107.5	11.7	蓮葉図	なし	漆塗り鏡箱
下藤沢Ⅱ遺跡2号墓墳	Ⅱa	?	?	109.3	11.8	菊花紋+蓮葉図	天下一	外面に布片付着した鏡箱
下藤沢Ⅱ遺跡19号墓墳	Ⅳa	?	?	109.3	11.8	龜甲文蓮葉図	なし	千歳市末広遺跡IP-90墓域から同一型式鏡
下藤沢Ⅱ遺跡22号墓墳	Ⅳa	?	?	84.9	10.4	蓮葉図	なし	背面に血盆経付着
色麻古墳群No.18地点近世墓	?	?	?	81.7	10.2	蓮葉図	天下一	
大日北遺跡第1次調査4号墓	Ⅲa	?	女	65	9.1	菊花双鳥図	なし	黒漆塗り鏡箱
大日北遺跡第1次調査18号墓	Ⅳa	?	女	88.2	10.6	蓮葉図	なし	
大日北遺跡第1次調査36号墓	Ⅳa	?	女	113	12	蓮葉図	天下一	鏡箱
高柳遺跡SM7	Ⅲ以降	?	?	113	12	蓮葉図	正口作	
新妻家他墓地17a号墓	?	1818年	男	15.9	4.5	無文	なし	新妻源之丞風俣
瑞鳳殿	Ⅱ相当	1636年	男	56.7	8.5	粗い叢紋	なし	錫鍍金 縁を切断加工 紙入に収納 伊達政宗
南藤防原遺跡SK84	?	?	女	60.8	8.8	蓮葉図	天下一	

第3表 近世墓出土の方形鏡

方形鏡出土墓名	銭期	埋葬年	性	鏡面積	長辺(cm)	短辺(cm)	文様	銘	備考
遠野南部家墓所27号墓	Ⅳa	1776年	女	32.5	6.5	5	なし	なし	
大平遺跡A地区10号墓	Ⅳc	?	?	30.1	7	4.3	団扇形に山水図	天下一作	
宇南遺跡第2土墳	ⅣaorⅣb	?	?	108.2	10.4	10.4	和歌「花ならは～」	天下一早川天介光泉	
善広殿	Ⅳ相当	1715年	男	94.8	12	7.9	石目地無文	飯村土佐守光重	[初期 江戸芝露月町]
陸奥国分寺跡8号墓墳	Ⅳa	?	?	51	8.5	6	丸に三瓣紋	天下一	
宇輪古遺跡SK62	Ⅲb	?	女	67.9	11.5	5.9	巴紋+梅花文+桜花文散らし	天下一	
南藤防原遺跡SK286	?	?	?	23.4	5.7	4.1	重ね菊花紋	天下一	
南藤防原遺跡SK286	?	?	?	35	7.3	4.8	春老人・大風天万歳の図	天下一作	
水無遺跡2次調査35号土坑	Ⅳa	?	?	24.8	6.2	4	日輪に若松の図	天下一	

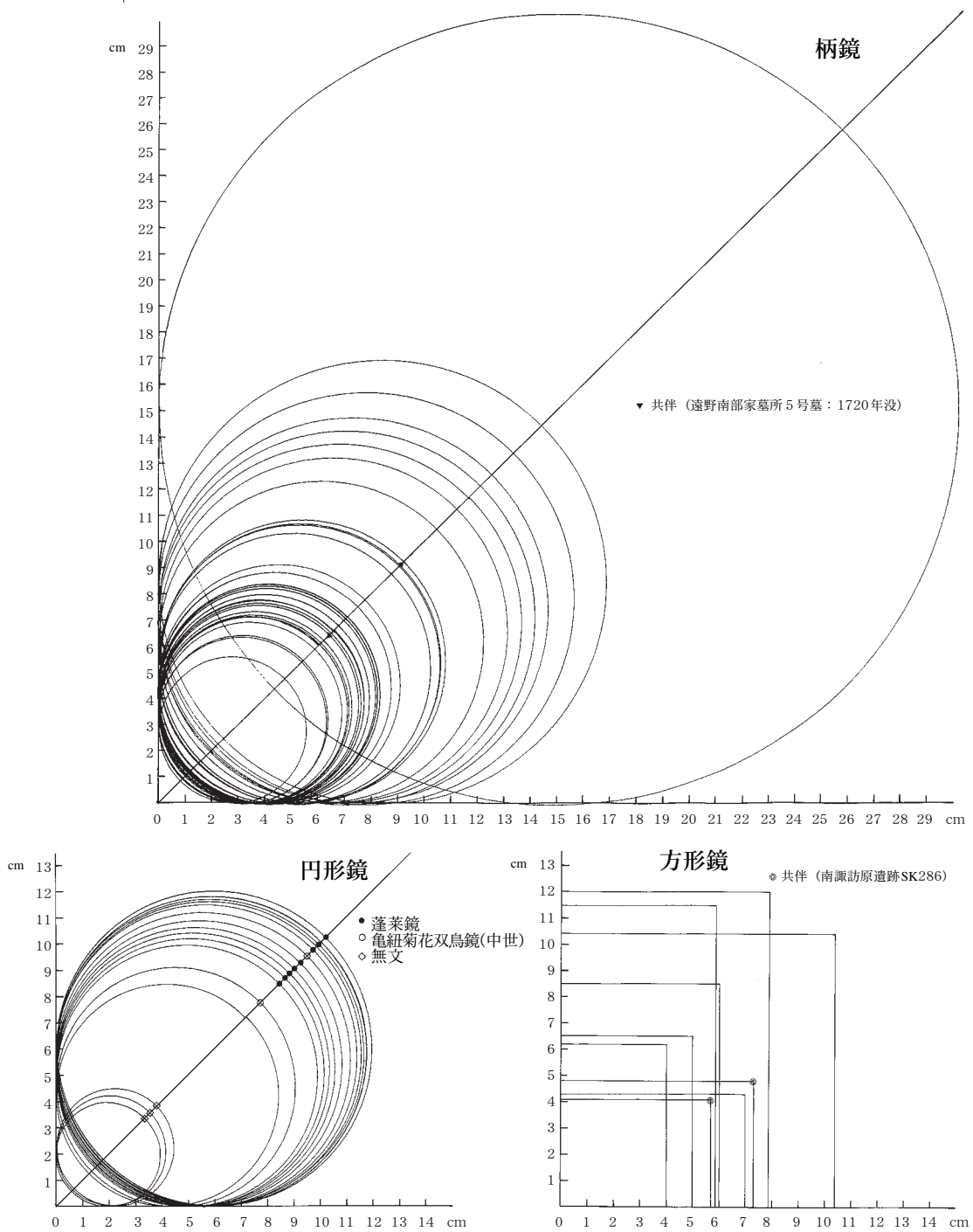


第2図 近世墓出土鏡の種類と副葬率

鏡のなかに鏡立と組むことが確実なものが存在する（『仙台市博物館収蔵資料図録』④の65）。墓に納められる鏡には、あくまで故人が携帯可能な手鏡や懐中鏡の類が求められたであろう。同時に、値の張る大型の置き鏡は、代々家に伝えられるべきものであって、通常、死者に副葬されるものではなかったと思われる。

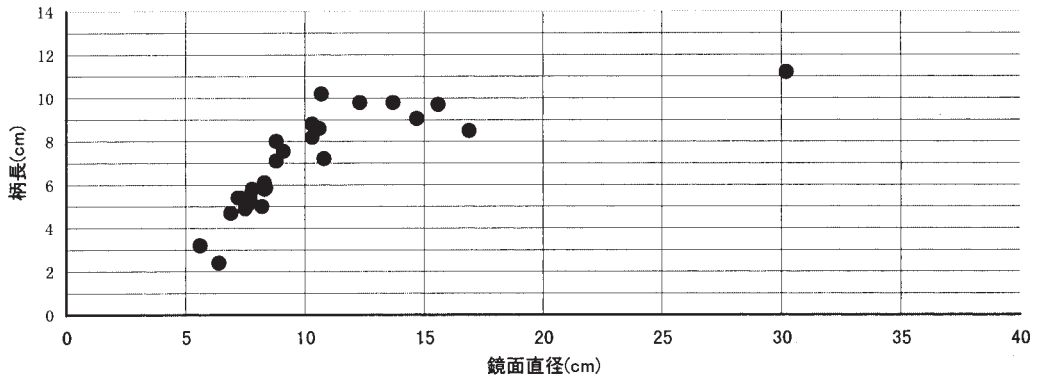
東北地方の近世墓に副葬された柄鏡のうち、被葬者の没年が判明するものに関して、年代の古いほうから順に第5～7図に示した（註1）。近世墓に副葬された柄鏡の背面文様は、具象的な図や文字（22例）が最も多く、次いで家紋（紋章化された意匠を含む12例）、家紋＋具象的な図（5例）と続き、無文（1例）は少ない。具象的な図のなかでは、松竹に鶴と亀が組み合わさる蓬萊図（第6図1・5）が多く認められる。蓬萊図を持つ柄鏡を出土した5基の近世墓のうち、被葬者の性別が判明する2基は、いずれも女性の墓である。

大名家に伝わる鏡などには、大名家の家紋を配した鏡が散見されるが、出土柄鏡にみられる家紋ないし紋章化された意匠のなかで、確実に被葬者の家紋と断定できるケースはなかった。踏み返し量産される鏡においては、家紋は単に文様という以上の意味を持つてはいなかったであろう。近世墓出土鏡のなかでは唯一、岩手県金ヶ崎町の大町盛頼（1839年没）の墓に副葬された鏡（第7図5）にだけが例外で、被葬者の姓の一字を表すと思われる、「大」の字5個を環状に連ねた紋様が認められる。被葬者は、仙台藩の重臣で、金ヶ崎要害の館主を務めた大町家（三千石）の8代目当主であり、この柄鏡は、大町家から「福島出雲守藤原吉定」を名乗る江戸日本橋通二丁目の鏡師に特注された品であろうか。

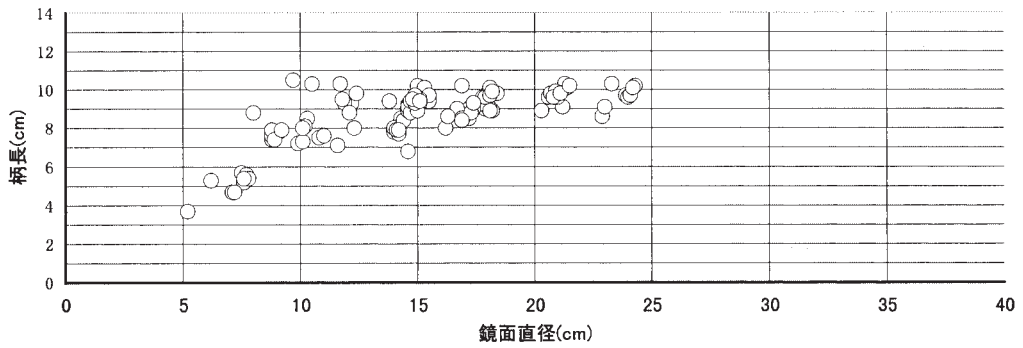


第3図 近世墓出土金属製鏡の鏡面の大きさ

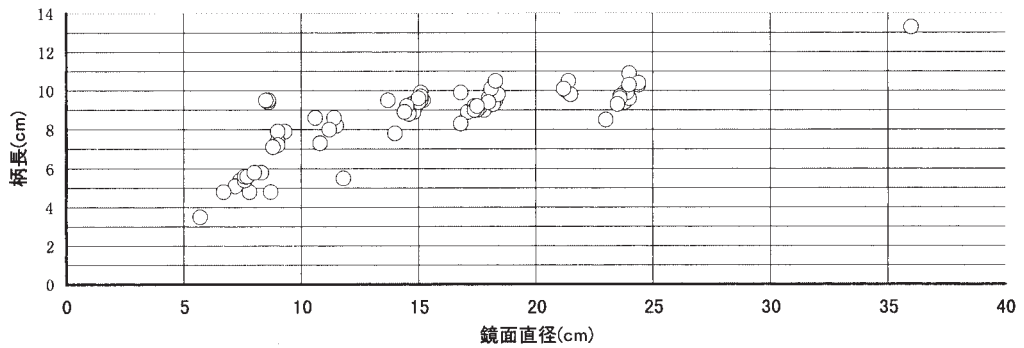
近世墓出土柄鏡の法量分布



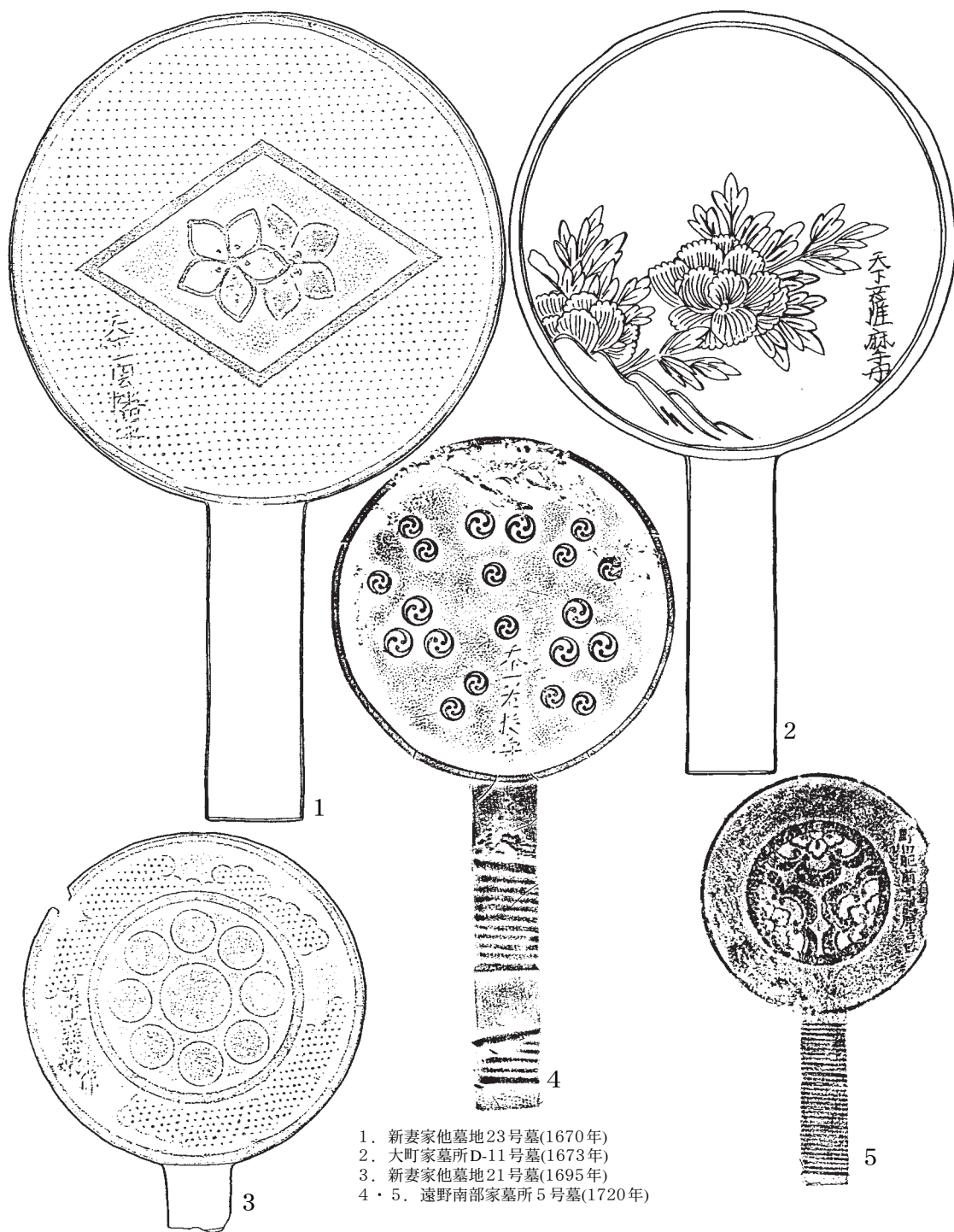
伝世した柄鏡の法量分布(1)
五木田コレクション(藤沼・伊藤1995)



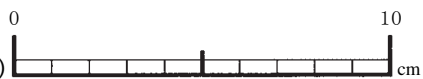
伝世した柄鏡の法量分布(2)
吉中コレクション(藤沼・伊藤1995)

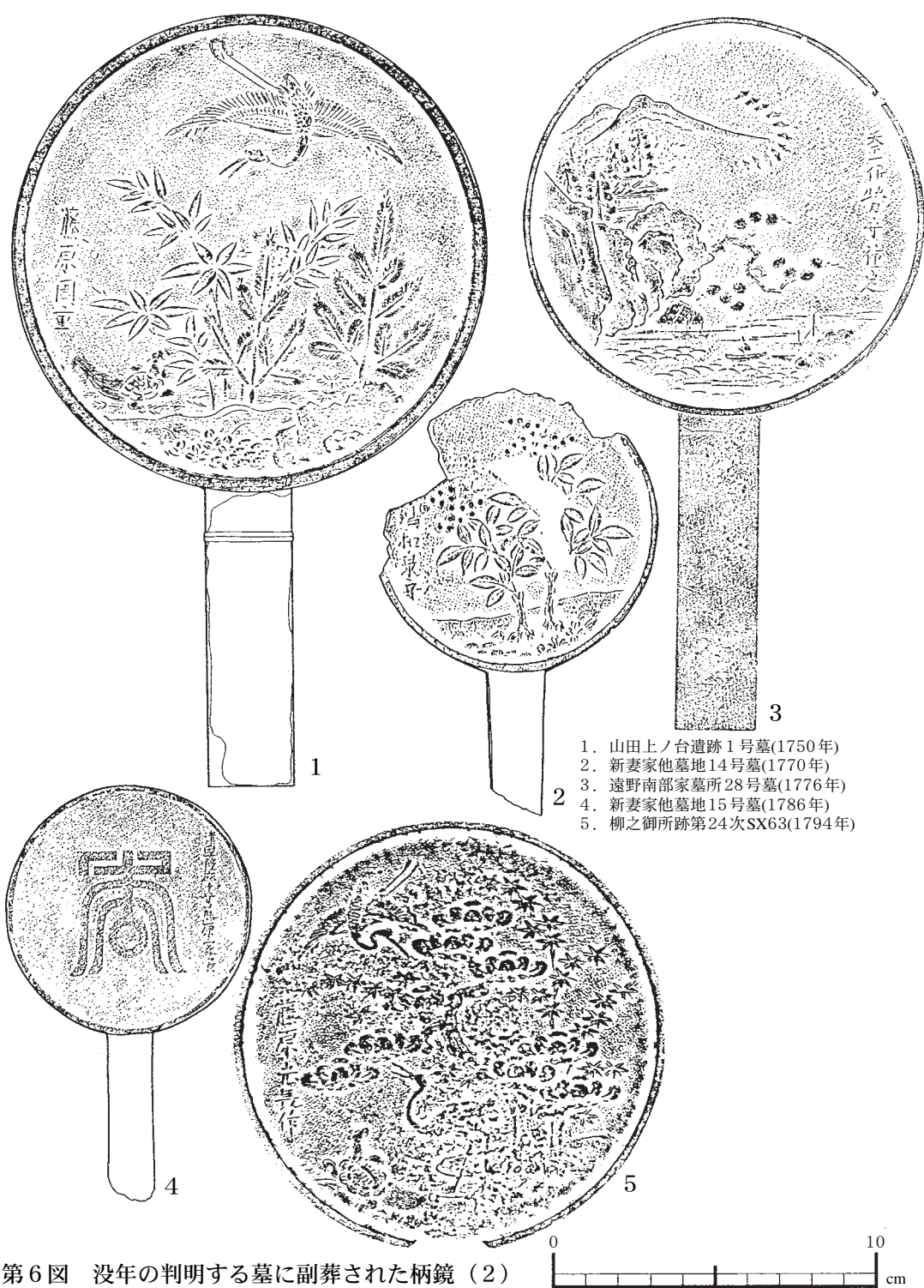


第4図 柄鏡における出土品(副葬品)と伝世品の大きさの比較



第5図 没年の判明する墓に副葬された柄鏡 (1)





第6図 没年の判明する墓に副葬された柄鏡（2）



第7図 没年の判明する墓に副葬された柄鏡（3）

②円形鏡

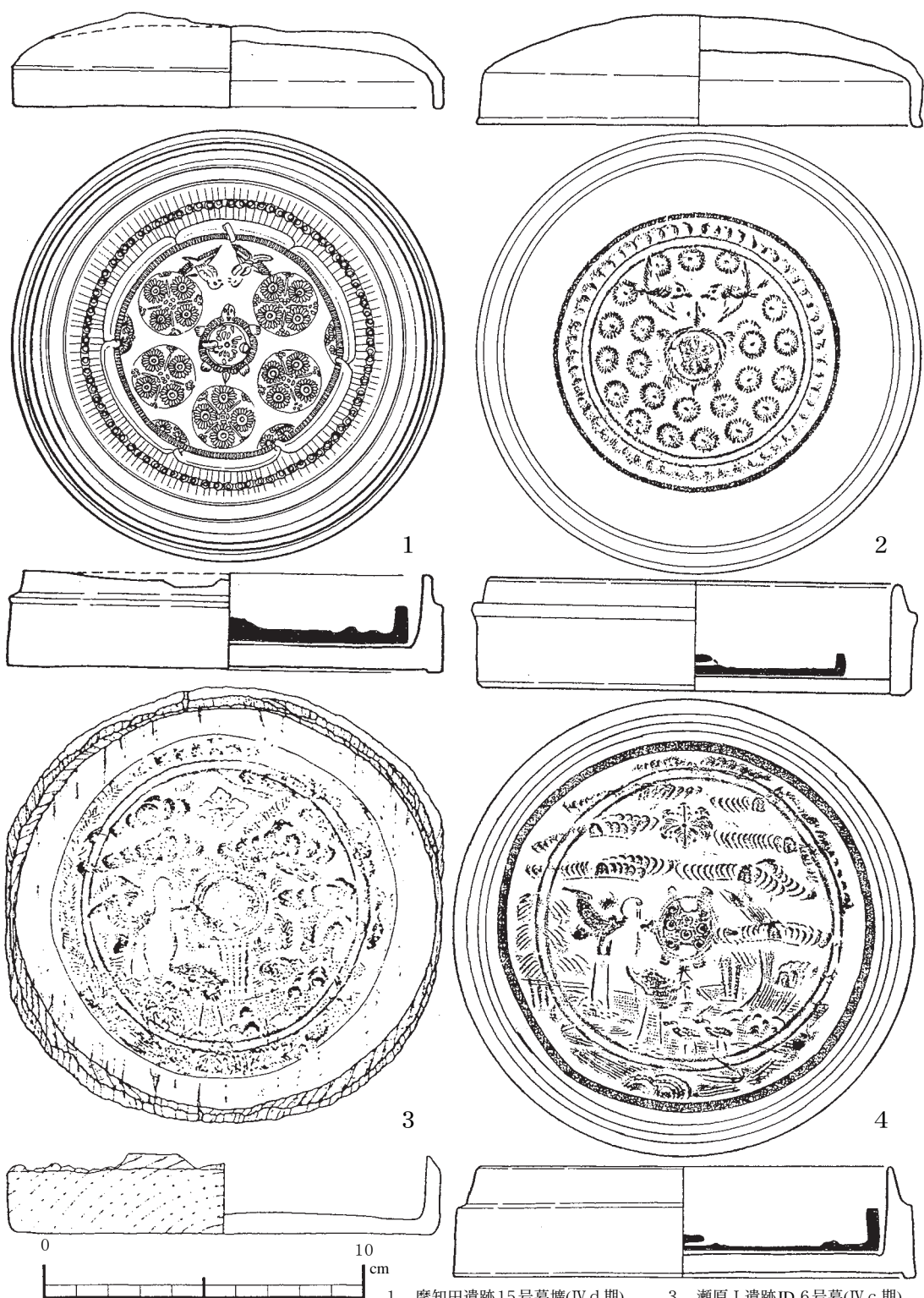
円形鏡は、直径4cm前後の無文のものと、直径が8～12cmで文様を持つものに分かれる（第3図）。前者は、単なる薄い小円板にすぎないが、鏡以外の用途が想定しにくい上、後者と同様、紙や布で包まれていた痕跡のあるものが含まれることから、鏡と認定した。

直径8～12cmの円形鏡は、文様により、菊花双鳥鏡、蓬莱鏡、その他に大別される。

【菊花双鳥鏡】 岩手県金ヶ崎町摩知田遺跡15号墓壙出土鏡（第8図1）と、宮城県多賀城市大日北遺跡4号墓出土鏡（同図2）の2例がある。摩知田例は1863年初鑄の文久永寶と共伴することから幕末・明治初頭頃、大日北例は六道銭が古寛永+文銭の組み合わせであることから17後葉～18世紀初頭頃、それぞれ墓に副葬されたと考えられる。菊花双鳥鏡自体は、鏡の様式から16世紀代に製作された可能性が高く、摩知田例は260年以上、大日北例でも100年以上伝世した鏡が副葬されたことになる。摩知田遺跡で検出された墓は、伊達氏一門の水沢留守氏の足軽を務めた小原家の所有であり、同家に伝来した鏡であろうか。

【蓬莱鏡】 蓬莱鏡には、蓬莱図のみのもの（9例）と、蓬莱図に家紋をくわえたもの（2例：第8図3・4）とがみられる。大きさは直径10～12cmと、比較的揃っている（第3図）。年代的には、菊花紋の加えられた蓬莱鏡が永楽銭+古寛永からなる六道銭と共伴して出土した、宮城県瀬峰町下藤沢Ⅱ遺跡2号墓壙例が最も古く17世紀中葉に遡るが、他の墓の例からみて、盛行するのは18世紀に入ってからであろう。蓬莱鏡は、近世の婚礼道具の一つとされ、徳川家光の長女千代姫が尾張徳川家二代藩主光友へ嫁した折りの豪華な婚礼調度として有名な「初音の調度」をはじめ、今日まで伝世した婚礼道具の中に、数多くの蓬莱鏡が見出せる。東北地方で円形の蓬莱鏡を出土した11基の近世墓のうち、被葬者の性別が判明する4基の墓全てに女性が葬られていた。また、下藤沢遺跡22号墓壙から出土した蓬莱鏡の背面には、幾重にも折り畳まれた状態の「血盆鏡」が付着していた（阿部1988）。「血盆鏡」は、不浄の血を流す女人が救われる道を説き、室町から江戸時代にかけて女性の間に普及した血盆信仰の中核をなす経典であった。蓬莱鏡と「血盆経」がともに副葬品として共伴したことは、まさに蓬莱鏡が女性と深く結びついた鏡であることの証であろう。

【そのほかの円形鏡】 下藤沢遺跡19号墓壙からは、亀甲型の枠内に菊花を組み入れた文様を地紋をとし、亀形の鈕の上方に向かい合う2羽の鳥を配した円形鏡が出土している（阿部前掲）。同一型式の鏡は、北海道千歳市末広遺跡において、元文4年（1739）の樽前a降下軽石・軽石流堆積物層（Ta-b層）に覆われた土壙墓（IP-90墓壙）から漆塗りの鏡箱に入った状態で出土している（田村ほか1981）。これらの鏡は、様式的にみても、菊花双鳥鏡と蓬莱鏡の中間に位置することから、近世初期に作られたものと推定される。仙台藩初代藩主伊達政宗墓（瑞鳳殿）では、出土した紙入れのなかに縁を切断加工した円形鏡が納められていた。背面には粗い霰紋が認められる。懐中鏡とするために縁を切り取ったと考えられている（伊東編1979）。



第8図 近世墓出土の円形鏡と鏡箱

1. 摩知田遺跡15号墓壙(IV d 期) 3. 瀬原 I 遺跡ID-6号墓(IV c 期)
 2. 大日北遺跡第1次4号墓(Ⅲ a 期) 4. 大日北遺跡第1次36号墓(IV a 期)

③方形鏡（第9図）

宮城県志波姫町宇南遺跡第2土壌出土の正方形を呈する鏡（第9図8）以外、縦長、横長の違いはあっても全て長方形を呈し、懐中鏡であったと考えられる。男性の墓1例、女性の墓2例が確認できる。年代的には、「飯村土佐守光重」銘をもつ仙台藩三代藩主伊達綱宗墓（善応殿）出土鏡（同図1）が最も古い。ほかに共伴した六道銭から、福島市宇輪台遺跡SK62出土鏡（同図3）も17世紀代のものと思われる。出土点数が少ないため断定できないが、17世紀代に作られたと考えられるこの2例は、他の方形鏡に比べ、大きさがやや勝っており、18世紀以降、方形の懐中鏡が小型化した可能性を指摘しておきたい。

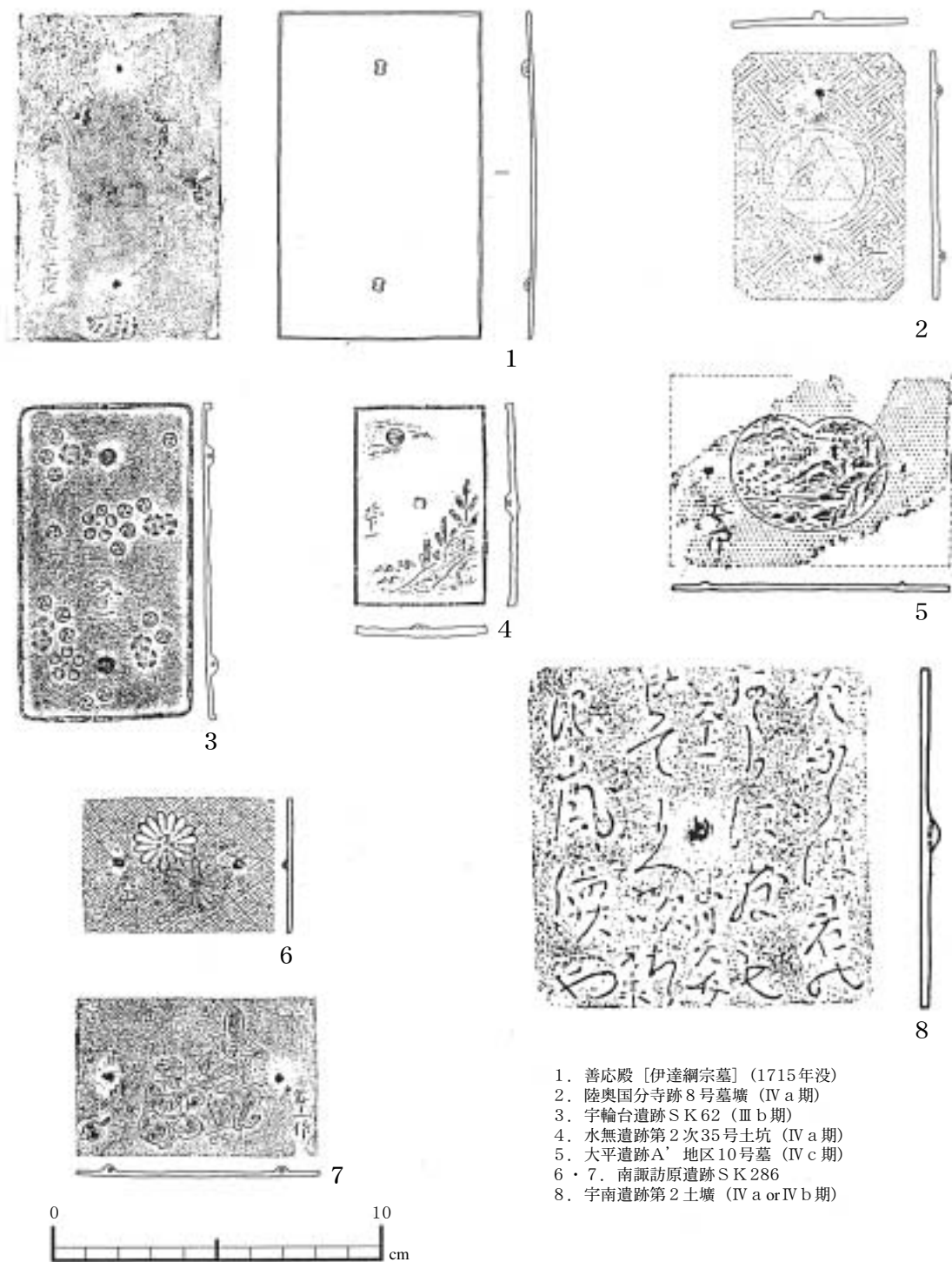
4. 江戸時代のガラス製鏡

明治16年に設立された日本硝子会社が、国産板ガラスの生産をある程度軌道に乗せ、それ以降、板ガラスが庶民生活の中に普及していくと考えられている。ガラス鏡についても、一般には、国産板ガラスの普及する明治後半以降、金属鏡に取って代わる形で広まったとみなされることが多かった。したがって、これまで江戸時代のガラス鏡については、伝世品の少なさもあり、さして注目されることもなく、特殊なものとして扱われてきたように思う。

一方、近世墓の副葬品を調べていくうち、薄く小さな板状のガラスが出土していることが判った。それらは大きく分けて、断面がごくごく僅かながらカーブを描くものと、平坦なものに分けられる。前者は凹面に、後者も片面に反射材とみられる付着物が認められる。また、実見した限り、反射材と考えられる物質は、ガラスの縁辺には付着しておらず、これら板状のガラスは、何らかの枠に入れられていた可能性が高いことも判明した。後述するように、PIXE分析の結果、付着物から錫と水銀が検出されたことから、これら板状のガラスは、片面に水銀アマルガム法により錫を付着させた鏡であることが確定できた。

今回集成したガラス鏡（第4表）の中で、墓碑に刻まれた年号から、新妻家他墓地7号墓（佐藤1986）、柳之御所跡24次調査SX5、同SX83（本澤1990）から出土した資料は、それぞれ1770年、1831年、1843年に墓に納められたことが明らかである。また、新井田古館遺跡SK46（坂川ほか1998）や長瀬C遺跡50H-2（本澤・佐々木1981）、柳之御所跡第24次調査SX32（本澤1990）、下藤沢Ⅱ遺跡14号墓（阿部前掲）、富沢遺跡15次調査1号墓（斎野ほか1987）、野中遺跡2次調査79号墓（青山ほか1998）の各出土資料も、六道銭をはじめとする共伴遺物から、江戸時代後期から末期のものである可能性が高い。これらの資料は、東北地方においても、近代以前にガラス製鏡が僅かながら使用されていたことを示しており注目される。Ⅳ期（1709年～1870年代）に限れば、近世墓出土鏡の約15%をガラス製の鏡が占めていたことになり、ガラス製鏡は、決して特殊なものではなかったと考えられる。ここで改めて問題となるのは、それら江戸時代に使われていたガラス鏡の製作方法と生産地である。

東北地方の近世墓から出土したガラス製鏡は、前に述べたとおり、断面が僅かながらカーブを描



第9図 近世墓出土の方形鏡

1. 善応殿〔伊達綱宗墓〕(1715年没)
2. 陸奥国分寺跡8号墓壙(Ⅳa期)
3. 宇輪台遺跡SK62(Ⅲb期)
4. 水無遺跡第2次35号土坑(Ⅳa期)
5. 大平遺跡A'地区10号墓(Ⅳc期)
- 6・7. 南諏訪原遺跡SK286
8. 宇南遺跡第2土壙(Ⅳa or Ⅳb期)

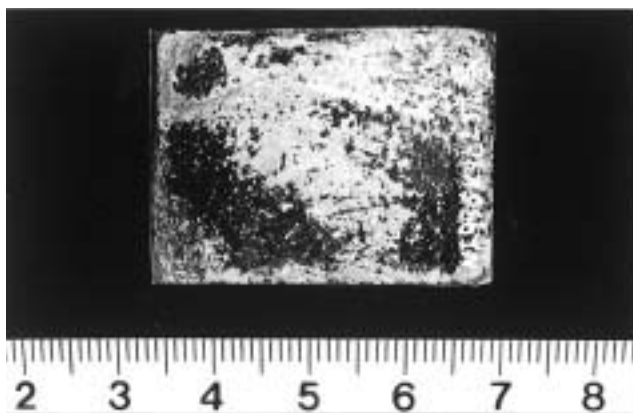
第4表 近世・近代墓出土のガラス製鏡

ガラス製鏡出土墓名	銭期	埋葬年	性	鏡面積	長辺(cm)	短辺(cm)	厚み(mm)	重量(g)	比重	材質	反射材	備考
新井田古館遺跡SK46	IVc	?	?	9.7	3.6	2.7	0.8	2.7	3.7	鉛ガラス	錫	曲面 凹面に反射材
長瀬C遺跡50H-2墓址	IVc	?	女	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未分析	未分析	
遠野南部家墓所18号墓	?	1911年	女	30.2	7.2	4.2	2.2	17.2	2.5	ソーダ石灰ガラス	錫	平坦 南部行義室美穂
遠野南部家墓所38号墓	?	1900年	女	238.76	18.8	12.7	1.7	112.6以上	2.55	ソーダ石灰ガラス	錫	平坦 南部行義長女千恵子
柳之御所跡第24次調査SX5	IVc	1831年	女	12.4	4	3.1	0.6	2.7以上	3.9	鉛ガラス	錫	凹面に反射材
柳之御所跡第24次調査SX32	IVa	?	?	不明	2.4以上	2.7	0.4	0.9以上	3.3	鉛ガラス	錫	凹面に反射材
柳之御所跡第24次調査SX83	IVc	1843年	女	不明	2.1以上	不明	0.4	0.6以上	3.2	鉛ガラス	錫	凹面に反射材
下藤沢Ⅱ遺跡14号墓	IVd	?	?	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未分析	未分析	未分析	上の屋門脇家
新妻家他墓地7号墓	IVc	1770年	男	21.6	5.4	4	未計測	未計測	未計測	未分析	未分析	平坦 千葉清吉
富沢遺跡15次調査1号墓	IVd	?	?	36.8	7.5	4.9	未計測	未計測	未計測	未分析	未分析	平坦 2枚あわせ 水銀付着
野中遺跡2次調査79号土坑	Ⅲa	?	?	22.2	5.7	3.9	未計測	未計測	未計測	未分析	未分析	平坦 黒色の紙付着

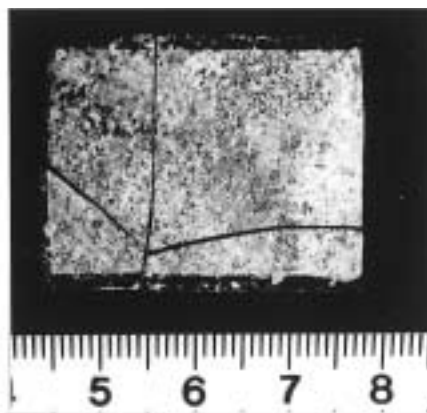
くものと、平坦なものに分けられる。このうち、僅かながら曲面を呈するものは、大きく球形に吹いたガラスをカットして「板状」にしている可能性が高い。江戸時代に国内で生産されたガラス製品は若干の例外はあるものの、基本的にはカリ鉛ガラスであり、珪酸原料としての石粉・鉛・アルカリ原料である硝石を原料としている。棚橋淳二氏や岡泰正氏らにより、鉛ガラスと、珪砂・ソーダ灰・炭酸カルシウムを原料とするソーダガラスとでは比重が大きく異なること、鉛ガラスに関しては、含まれる鉛の比率が時期により変化するため、比重からある程度製作年代の推定が可能であることなどが指摘されている（神戸市立博物館1990、岡1996）。

近世墓出土のガラス製鏡の材質を推定するため、神戸市立博物館の岡泰正氏の協力を得て、比重の測定を行った。その結果、第4表に示したように、新井田古館遺跡SK46、柳之御所跡24次調査SX5・SX32・SX83出土の江戸時代のガラス製鏡の比重は、3.2～3.9の値を示し、鉛ガラスであることが判った。一方、遠野南部家墓所の明治期の墓から出土したガラス製鏡は、その比重は2.5前後と、ソーダガラスであることも判った。なお、江戸時代に輸入されたヨーロッパ製の鉛クリスタルガラス器の比重は2.9～3.2程度であり（岡前掲）、今回分析した江戸期の近世墓出土ガラス鏡よりも比重値が小さいことから、東北地方の近世墓に副葬されたガラス製鏡は、鉛ガラスを原料として国内で生産されたと推定できる。

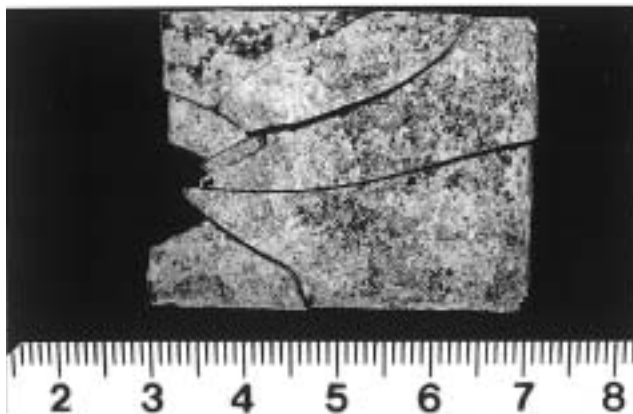
比重の測定を行ったガラス製鏡6点は全て、片面に付着物が見られたことから、次にこの付着物を特定することとした。分析は、東北大学大学院工学研究科量子エネルギー工学講座石井研究室の松山成男助手の協力を得て、同研究室の開発したサブリミPIXEカメラと大気中PIXE分析法を組み合わせた手法で行った（註2）。その結果、分析した6点の試料に付着していた物質には、錫と水銀が多く検出された。これは、水銀アマルガム法により反射材となる錫をガラスに密着させたことを示している。このような方法は、1317年にベネツィアで開発され、その後1835年にドイツのフォン・リービヒが現在の製鏡の基となるガラスの上に硝酸銀溶液を沈着させる手法を開発するまで、ガラス鏡の反射法として用いられていたものであった。注目されるのは、遠野南部家墓所から出土した近代のガラス鏡2点は、他の江戸時代の鉛ガラス製鏡とは異なり、ソーダガラスを素材としながらも、ガラスに錫を水銀により定着させる伝統的な手法が用いられている点である。日本国内では、明治16年（1883）頃から銀引法によるガラス鏡が輸入されはじめ、明治20年代には、国内でも輸入板ガラスを用いて、硝酸銀使用の天日による銀引法でガラス鏡が作られるようになった。



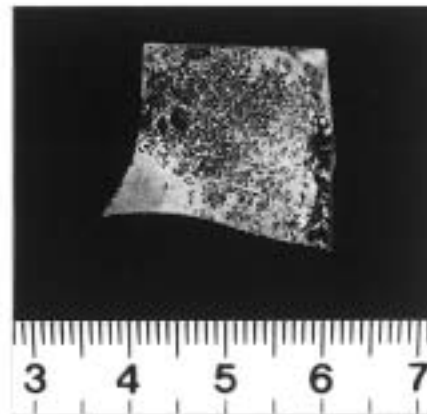
1. 新井田古館遺跡SK46 (IV c 期)



2. 柳之御所跡第24次SX32 (IV a 期)



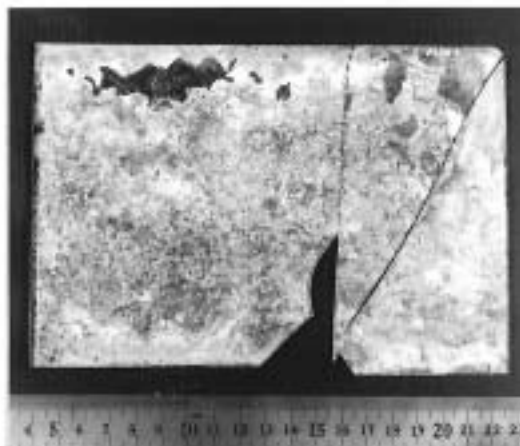
3. 柳之御所跡第24次SX5 (1831年)



4. 柳之御所跡第24次SX83 (1843年)

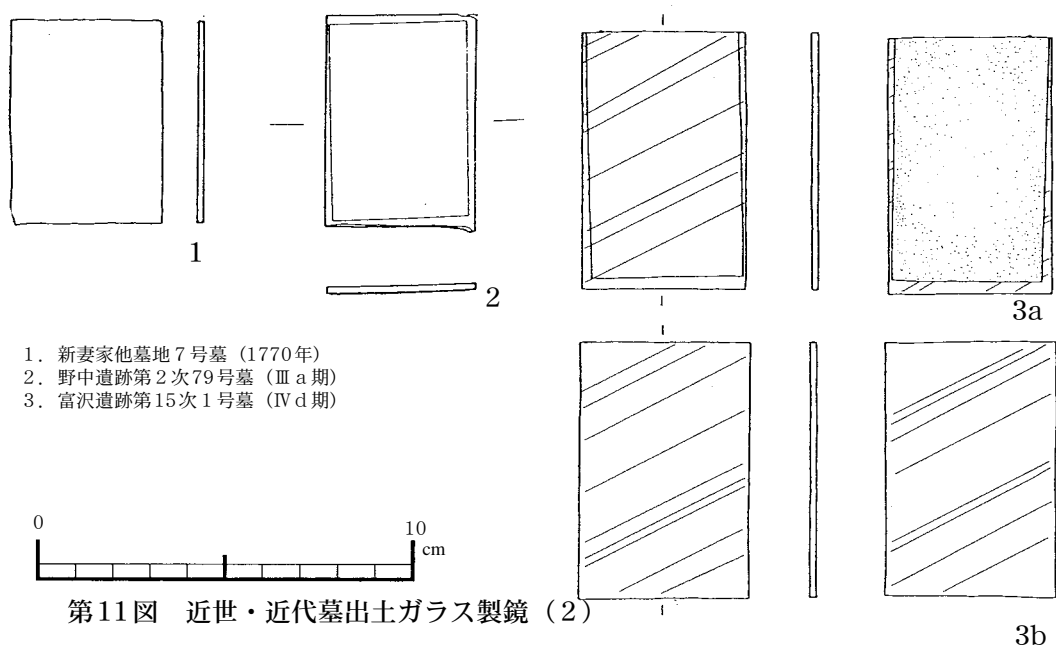


5. 遠野南部家墓所18号墓 (1911年)



6. 遠野南部家墓所38号墓 (1900年)

第10図 近世・近代墓出土ガラス製鏡 (1)



たと考えられている。遠野南部家墓所出土のガラス鏡は2点とも、副葬された年代からは銀引法であってもおかしくない時期のものでありながら、錫が使われている。明治前半期に、輸入板ガラスに国内で錫加工を施した製品であろうか。

管見では、江戸時代の国産ガラス鏡は、泉州岸和田藩の髻鏡が知られる程度で、その生産や流通の実体に関する研究はほとんどない。岸和田藩の髻鏡についても、和泉国日根郡中之庄湊村（現在の泉佐野市）の年寄であり、油や干鰯を扱う一方、廻船業も営んでいた、里井治右衛門の役用方日録に、幕末の中之庄湊村で製造された髻鏡の種類やその価格、生産高が記されている程度で、髻鏡そのものの実体はよくわかっていない。安政3年（1856）に里井治右衛門が記した役用方日録からは、髻鏡の大きさには大小2種類があること、製品の質により、大は最も高価な「鳳凰印」（1枚につき銀二匁）から「鶴印」（同じく二分）までの6ランクに、小も「九段印」（一分四厘五毛）から「一段印」（四厘）までの9ランクに分かれていたこと、年間の生産量は、大の部が約3000枚、小の部にいたっては年間40000枚にのぼることなどが判明する（北中通村役場1930）。幕末にはこれだけ多くの髻鏡が生産されているのも関わらず、現在、地元に残っている製品はほとんど残されていないという（歴史館いずみさの樋野修司氏のご教示による）。同じく役用方日録には、天保13年（1832）に諸職仲間御停止令により鏡職仲間が解散されたことが記されており、当地における髻鏡の製造がそれ以前から行われていたことが判るが、どこまで遡るかについては判然としない。

東北地方の近世墓から出土するガラス鏡は、手のひら以下の小型品に限られる。そのなかで、鉛ガラスを吹いて製造した国産品は、前に紹介した泉州中之湊の髻鏡と年代的にも近く、それと照らし合わせれば、1枚あたり1分前後の値段となろう。同じく江戸末期の鏡問屋金森恒七の記録によ

れば、柄鏡のうち踏み返しを繰り返した最低ランクの鏡（「彦」）の卸値が、七寸内外の映し鏡と五寸以下の合せ鏡のセットで1分である（中野1969）。このことから、おそらく江戸末期に作られた国産の小型のガラス鏡は、少なくとも価格の点では、安物の柄鏡と同じく、庶民の手の届くものであったといえよう。

なお、東北地方に伝世した江戸時代のガラス鏡としては、現在八戸市の指定文化財になっている「阿蘭陀硝子御鏡」（上杉雪子氏蔵）が重要である。この鏡は、八戸南部家文書『系譜』（八戸市立図書館蔵）にも登場し、オランダから將軍家に献上されたものを、五代將軍綱吉が、元禄元年（1688）、御側衆拝命直後の八戸藩二代藩主南部直政に下賜したものである（藤田・大嶋2001）。「米雲羅姿見御鏡」（遠山家文書『御九代集』（八戸市立図書館蔵）とも呼ばれるが、「米雲羅姿」はビードロの当て字であろう。この鏡は、長辺102.0cm、短辺74.5cm、厚さ約2mmの長方形を呈する平板で透明なガラス板で、「御拝領御鏡」と箱書きされた木箱に納められている。現在、ガラスの両面に付着物らしき痕跡は全く認められず、このままでは鏡としての機能を果たし得ない。伝来を信じるならば、ガラス製鏡を二次的にガラス板に転用した可能性を考えておきたい。本資料は、熔けたガラスの塊を型に流し込み、ローラーで伸ばして後から研磨する、いわゆる鑄造ガラスの可能性が考えられ、17世紀後半のヨーロッパ産と推定される（岡泰正氏のご教示）。年代や大きさの点で、本場ヨーロッパでもほとんど伝世品を探し得ないものと言えよう。

前に岸和田藩の鬘鏡について触れたが、東北地方では、仙台北南町でつくられた「仙台ビードロ」が知られており、地方で江戸期のガラス鏡が製造されていた可能性は高い。「仙台ビードロ」は、長崎ガラスの職人庄吉が、天保12年(1841)か13年頃、江戸から仙台に移り住み、南町若生屋の借家に構えた工房で作られたとされる（只野1977）。製品としては、「けむりガラス」と呼ばれる鼈甲色の櫛や簪が知られており、これらは、天保年間の奢侈禁止令によって使用が禁じられた鼈甲の櫛や銀の簪の代わりに売り出され、東北はもとより、関西や江戸にも輸出されたという（只野前掲）。他に「仙台ビードロ」の遺品として、皿・徳利・盃・チロリ・コップ・碗といった容器類やキセルが伝えられていることから、鬘鏡の製造も技術的には十分可能であったと思われる。

5. むすび

美術工芸品や歴史・民俗資料には、江戸時代の物質文化を知るための材料が数多く存在する。今回取り上げた近世の鏡に関しても、美術工芸品や歴史・民俗資料のなかに、伝世された膨大な資料を見いだすことができる。しかし、伝世鏡の場合、鏡そのものは残っていても、鏡を使用した人間や使用状況に関する情報は、ほとんど失われてしまっている。鏡の使われかたについては、浮世絵をはじめとする絵画資料や古文書からある程度、推察することができるが、絵画資料や古文書に登場する鏡が、具体的に伝世鏡のうちどの鏡を指すか特定することは不可能に近い。浮世絵を例に挙げるなら、浮世絵の題材となるのはあくまで鏡に映る人物であるため、人物を映すための道具に過ぎない鏡については、全体の形状や大きさは表現されても、和鏡の重要な要素である裏面の文様は



第12図 仙台市栽松院近世墓地の改葬工事で出土した鏡

無視される。

近世墓出土鏡は、伝世鏡に比べ、一般に美術工芸的な価値は低い、それを使用した人物に関する様々な情報を備えている点で、伝世鏡にはない歴史的価値を持つ。本論では、東北地方の近世墓から出土した鏡の分析を中心に、伝世品との比較も交えて、江戸時代の鏡を検討した。

ここで改めて、検討結果のうち主なものを以下に列記する。

- ①近世墓に副葬される鏡は、手鏡や懐中鏡といった、基本的には故人が生前使用した鏡である。
- ②東北地方に鏡が普及する過程で、17世紀後半に画期が存在する。
- ③古代以来和鏡の主流であり続けた円形鏡は、17世紀代に、次第に柄鏡に取って代わられるが、18世紀以降も、僅かに蓬莱鏡として婚礼道具の中に生き続ける。
- ④男女いずれの墓からも鏡は出土するが、柄鏡にせよ円形鏡にせよ、蓬莱図の鏡だけは女性の墓にしか副葬されない。
- ⑤幕末には、鉛ガラスを吹いたものを長方形に切り、凹面に反射剤である錫を水銀を用いて付着させた、国産の小型ガラス製懐中鏡がある程度流通していた。その価格は、踏み返しを繰り返した最低ランクの柄鏡とほぼ同等か、それ以下であり、庶民の手の届くものであった。

⑤で指摘した、小型ガラス製懐中鏡については、文献史料に、幕末に国内で大量に製造されていたことが記されているが、伝世品がほとんど残されていないため、これまで存在そのものが忘れられていた。今回、近世墓の副葬品（考古資料）の中にその存在を確認し、改めて文献史料との対比や、自然科学的な分析を行うことで、僅か150年程前に庶民に使われていながら、その後忘れ去られてしまった、「鬢鏡」の製作方法や流通状況を推察することができた。

近世墓に副葬された金属鏡は、文様が不鮮明で鏡胎の薄いものが多く、そのほとんどは、踏み返しを重ねた二級品・三級品である。しかし、同時に、鏡箱を伴っていたり、布や紙で包まれていた痕跡を持つものも多く、遺愛の品であることも確かである。これら故人が大切にした鏡があたかも死者の生前の姿を映し出すかのように、我々は、近世の考古資料を通して、具体的な江戸時代像をみることができよう。

謝辞

神戸市博物館の岡泰正学芸員には、ガラスの比重値の測定をしていただいた上、数々の有益なご教示を得た。ガラス鏡に用いられた反射材の成分分析では、東北大学大学院工学研究科の松山成男助手にお世話になった。また、本稿をまとめるにあたり、次の方々や機関にご指導・ご協力いただいた。末筆ではあるが感謝申し上げる。

及川司、小笠原晋、小向裕明、千葉周秋、樋野修司、藤沼邦彦、藤田俊雄、本澤慎輔、本田泰貴、神戸市立博物館、遠野市立博物館、八戸市博物館、歴史館いずみさの、金ヶ崎町教育委員会、平泉町教育委員会 東北大学大学院工学研究科量子エネルギー工学講座石井研究室（敬称略）

(註1) 図示したなかで、未発表であった遠野南部家墓所の柄鏡は、筆者が今回新たに資料化した。また、大町家墓所の柄鏡については、金ヶ崎町教育委員会のご厚意により提供を受けた実測図を筆者がトレースした。

(註2) P I X E (Particle Induced X-ray Emission) 法とは、陽子または α 粒子などの重荷電粒子を数MeVにまで加速して試料に照射し、放出される特性X線を測定することにより、試料中に含まれる微量元素の同定を行う分析法である。P I X E法は、非常に低いビーム電流で、しかも大気中で試料を照射する場合、非破壊で元素分析が可能である。

今回の分析データを以下に示す。

分析資料名／主要元素	Al	Si	S	Ar	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	Ga	Br	Sn	Hg	Pb	Bi	At
遠野南部38号墓ガラス鏡		140.628		140.724		26.13	5.0615	46.726	13.1859				1972.76	718.2596	88.5121		
Siで規格化		1		1.000683		0.185809	0.035992	0.332267	0.093764				14.02822	5.107515	0.629406		
遠野南部18号墓ガラス鏡		539.9	427.646	379.492		53.002	8.7727	165.048	40.5791	138.8303		396.7194	3499.941	3299.155	277.0981		
Siで規格化		1	0.792084	0.702893		0.09817	0.016249	0.305701	0.07516	0.257141		0.734802	6.482573	6.110678	0.51324		
新井田古館SK46ガラス鏡		217.55	59.442	62.606				37.606	8.1002		31.1198		399.5556	50.621	3824.293		52.5783
Siで規格化		1	0.273234	0.287778				0.172861	0.037234		0.143047		1.838615	0.232687	17.57691		0.241684
柳之御所SX83ガラス鏡		207.44	74.93	71.142				144.082	3.705		34.0499		259.9236	49.7385	3949.045		51.83
Siで規格化		1	0.361213	0.342852				0.694572	0.017861		0.164143		1.253006	0.239773	19.03705		0.249855
柳之御所SX5ガラス鏡		198.04	36.922	99.314		13.88		152.062	8.9146	8.9338			624.3926	885.8334	1817.648	91.3175	
Siで規格化		1	0.186437	0.501485		0.070087		0.767835	0.045014	0.045111			3.152861	4.473002	9.178186	0.461106	
柳之御所SX32ガラス鏡		184.114	52.592	97.336		14.644		82.274	4.7651	18.6444	11.372		901.4117	482.302	1865.803		
Siで規格化		1	0.285649	0.529672		0.079538		0.448664	0.025881	0.101266	0.061766		4.899943	2.619584	10.13395		
柳之御所SX83ガラス小玉		984.972	270.742	80.516	460.438	26.344		5.858	16.2315						651.7251		
Siで規格化		3.638047	1	0.29739	1.700652	0.097303		0.021637	0.059952						2.407181		

【引用・参考文献】(発掘調査報告書以外)

青木豊・内川隆志編 1994 『柄鏡大観』 ジャパン通信社

石巻文化センター 1987 『企画展「鏡の歴史－宮城県の伝世・出土鏡を中心に－」図録』

大阪府泉南郡北中通村役場 1930 『北中通村誌』

岡泰正 1996 『びいどろ・ぎやまん図譜』 淡交社

久保智康 1999 『中世・近世の鏡』 日本の美術3 No.394 至文堂

神戸市立博物館 1990 『The びいどろ展』図録

神戸市立博物館 2000 『びいどろ・ぎやまん・ガラス』特別展図録

小林忠・大久保純一 1994 『浮世絵の鑑賞基礎知識』 至文堂

菅谷文則 1991 a 「法隆寺西門堂に奉納された鏡」『有坂隆道先生古稀記念日本文化史論集』 163～172頁
同朋社出版

菅谷文則 1991 b 『日本人と鏡』 同朋社出版

関根達人 1999 「東北地方における近世食膳具の構成」『東北文化研究室紀要』第40集 33～56頁

関根達人 2000 a 「江戸時代の喫煙に関する考古学的検討」『文化』第64巻1・2号 69～88頁

関根達人 2000 b 「遠野南部家墓所出土のオランダ産クレイパイプとその意義」『岩手考古学』12号 95～107頁

関根達人 2000 c 「文化財としての近世墓」『宮城歴史科学研究』第49号 1～9頁

高橋あけみ 1992 『仙台市博物館収蔵資料図録④ 木漆工』 仙台市博物館

高橋あけみ 2000 『仙台開府四百年記念特別展「大名家の婚礼」図録』 仙台市博物館

只野淳 1977 「〈仙台民芸シリーズ〉① 仙台・けむりガラス」『民芸』290号 33～36頁

中野政樹 1969 『和鏡』 日本の美術10・11 No.42 至文堂

樋口隆康 1979 『古鏡』 新潮社

藤田俊雄・大嶋千早 2001 『特別展「八戸藩～大名の江戸と国元～」図録』 八戸市博物館

藤沼邦彦・伊藤康子 1995 「和鏡の拓本集成(1)」『東北歴史資料館研究紀要』第20・21巻 21～127頁

府中市郷土の森博物館 1996 『特別展江戸の粋－柄鏡』図録

- 浜田淑子 1996 「柳宗悦と手仕事の発見」 『仙台市史』特別編3 美術工芸 520～539頁
 前田洋子 1977 「柄鏡の変遷」 『大阪市立博物館研究紀要』第9冊 33～63頁
 前田洋子 1985 「柄鏡の変遷（そのⅡ）」 『大阪市立博物館研究紀要』第17冊 23～56頁
 前田洋子 1989 「柄鏡の変遷（そのⅢ）」 『大阪市立博物館研究紀要』第21冊 25～58頁
 前田洋子 1993 「柄鏡の変遷（そのⅣ）」 『大阪市立博物館研究紀要』第25冊 1～24頁

【引用・参考文献】（発掘調査報告書）

- 青山和人ほか 1998 『野中遺跡（第2次）・山田C遺跡（第2次）・仁戸内館跡発掘調査報告』 郡山市教育委員会
 阿部正光 1988 『下藤沢Ⅱ遺跡』 瀬峰町文化財調査報告書第6集
 伊東信雄編 1979 『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品』 瑞鳳殿再建期成会
 伊東信雄編 1985 『感仙殿伊達忠宗・善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』 財団法人瑞鳳殿
 大竹篤ほか 1990 「師山遺跡」 『相馬開発関連遺跡調査報告書』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第234集
 角田克人 1989 『水無遺跡Ⅱ』 安子島地区土地改良関連発掘調査報告書2
 工藤哲司 1981 『史跡陸奥国分寺跡』 仙台市文化財調査報告書第27集
 小向裕明・佐藤浩彦 1992 『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』 遠野市埋蔵文化財調査報告書第5集
 昆野靖ほか 1986 『水神遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第96集
 工藤武 1985 『一関地区遊水地関連埋蔵文化財発掘調査報告書－大平遺跡』
 斎野裕彦ほか 1987 『富沢』 仙台市文化財調査報告書第98集
 坂川進ほか 1998 『新井田古館遺跡』 八戸市内遺跡発掘調査報告書10 八戸市埋蔵文化財調査報告書第74集
 佐々木清文・阿部勝則 1995 『上米内遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第270集
 佐藤好一ほか 1995 『高柳遺跡』 仙台市文化財調査報告書第190集
 佐藤典邦 1987 『白米中坪A・B遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第15冊
 佐藤洋 1986 「新妻家墓地改葬調査報告」 『年報7』 仙台市文化財調査報告書第94集 37～54頁
 主浜光朗編 1987 『山田上ノ台遺跡』 仙台市文化財調査報告書第100集
 高橋一浩 1996 『岩脇遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第235集
 高橋寛寿・千葉周秋 1990 『魂の家－発掘された近世の墓』 金ヶ崎町中央生涯教育センター
 武田健一 1988 『大日北遺跡』 多賀城市文化財調査報告書第49集
 武田耕平・丸山泰徳・堀江格ほか 1991 『南諏訪原遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第44集
 田村俊之ほか 1981 『末広遺跡における考古学的調査（上）』 千歳市文化財調査報告書Ⅶ
 千葉周秋 1998 『摩知田遺跡』 岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第38集
 遠野市教育委員会 1976 『有形文化財』 遠野市文化財調査報告書11集
 遠野市教委区委員会 1978 『遠野南部家墓所改葬調査概報』 遠野市文化財調査報告書14集
 花坂正博・溜浩三郎 1997 『瀬原Ⅰ遺跡第2次・第3次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第257集
 古川一明 1982 「色麻古墳群」 『宮城県営園場整備関連遺跡分布調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第86集
 本澤慎輔 1981 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第16集

本澤慎輔 1990 『柳之御所跡発掘調査報告書』 岩手県平泉町文化財調査報告書第19集

本澤慎輔・佐々木清文 1981 『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書（二戸市長瀬C遺跡・長瀬D遺跡）』 岩手県埋文センター文化財調査報告書第22集

丸山泰徳ほか 1993 『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告書』 福島市埋蔵文化財報告書第58集

遊佐五郎 1980 「宇南遺跡」 『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第69集 501～556頁

吉岡恭平・篠原信彦 1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書第126集